

失われたものを追求めずに

―精神障害者の生活の記録―

谷中輝雄編

やどかり出版 A5判 二九七頁 二、〇〇〇円

現代の精神医学および精神医療の最も重要な対象とみなされる精神分裂病は、原因が不明の明のうえ、治療が難しい病である。

この病の症状は、知覚、思考、言語、感情、意志、欲求など、人間の精神機能のほとんどすべてにわたる。こうした分裂病の症状により病者は、妄想、幻覚、自閉症などを引きおこし、時として興奮したり、突飛な行動をとる場合もある。このため、かつて日本における精神分裂病の治療といえば、病院への入院による治療が中心であった。しかし、病院という人工的な場所への長期間の入院は、現実の社会との間にかい離を生みだし、

「失われたものを追求めずに」は、このやどかりの里が第四十回保健文化賞を受賞したのを記念して出版されたものである。

精神障害者の退院後の生活に多くの問題を残した。「やどかりの里」は、医療と福祉の谷間で取り残されてきた「精神障害者のごくあたりまえの生活」の実現を基本理念として、昭和四十五年に誕生した。その活動は、デイケア、回復者クラブ、作業所へと広がり、四十八年には精神障害者の社会復帰施設として、公益法人の認可を受けた。

本書は、第一章「生活と病とのつながり」、第二章「私の体

次に第二章「私の体験」では、三人の手記と、家族や専門家など、彼らにかかわる人たちの体験や思い、さらに手記を読んだ人たちの感想などが取り上げられている。家庭と家族の愛情に飢え、心の中に幻の愛をつくりだした女性の手記「幻の愛の時間」。病に犯されはじめた時の経験、精神病院への入院、そして病をかかえながらも確かな足取りで再び歩き出す、という心の変化を時間の流れの中にとらえた「その1、僕は神になった」

「病をぬきに生活はかたれない」精神障害者の自立や生きがいについてふれた「自立をめざして」、それぞれが自分自身の生き方と健康について語った「自分の健康は自分で守る」、健康の自己管理と薬との付き合いについて語った「薬とわたし」、病と疲れとの関係を考えた「疲れとわたし」から構成されている。

この章を読み進めていくと、「爽風」の号が重なるとともに、病と対峙し、編集同人の目も深化していく様子が分かる。まさに雑誌「爽風」は、「やどかりの里」の昭和五十三年から六十年までの実践でもあったのだ。

「その2、ある夢の体験」「その3、そして、今」。病によりぎ折を繰り返しながらも、自分の生き方を見いだしていく人の手記「失われたものを追求めずに」。

この中で、「失われたものを追求めずに」という手記は、本書のテーマにもなっているが、実は唯一、「やどかりの里」の部外者の原稿である。

このように本書は、病というものを縦系にしなから、やどかりの里にかかわるさまざまな人たちの体験や思いが横系として織り込まれ、そこには、病をか

かえて生きてきた、彼らの姿が赤裸々に描かれている。本書を読むことにより我々は、言葉でしか知らない精神分裂病というもの、自分の哀しみや痛みとして、理解することができる。

それは、抽象的な理論や専門家の紹介するさまざまなケースリポートとは違い、「やどかりの里」を共に支え、共に生きてきた者たちが、自らの体験として語る重さゆえなのであるか。それとも、余りに純真な精神ゆえに苦しみを背負うことになった彼らに、同じ社会に生きる者として共鳴するところがあるのだろうか。

「やどかりの里」の創設者でありこの本の編者でもある谷中輝雄氏は、まえがきの中で「病は残酷である。けれども、ふりかえてみれば、悪戦苦闘の中にもそれなりの生きる道を見いだした人の静かなるたがずまいを見る気がするのである」と出版化に至った気持ちを語っている。

(やどかり出版・〇四八六一八六一〇四九四)

企画財政局 伊藤 孝